

氏名(本籍) : かね こ かつ ぶ金子一夫(茨城県)

学位の種類 : 博士(美術)

学位記番号 : 第3号

学位授与年月日 : 平成5年11月30日

学位論文等題目 : 「近代日本美術教育の研究 明治時代」

論文等審査委員 :	(主査)	東京芸術大学 教授(美術学部)	荒川 明 照
	(論文担当副査)	" "	(") 千葉 通 夫
	(副査)	" "	(") 武藤 三千夫
	(")	" "	(") 坂本 一 道
	(")	お茶の水女子大学	" (文教育学部) 上野 浩 道

(論文内容の要旨)

幕末の開成所の画学教育に始まる近代日本美術教育は、教育内容の近代化・西洋化過程という観点から明治後期の教育的図画で一区切できる。本研究は、この期間と教育的図画実施期であった大正前期を含めた近代日本美術教育を、とりあえず明治期美術教育と呼び、その展開過程と各時期の特性、さらには未解決であった個別的諸問題を実証的に明らかにした。

この期間の美術教育史研究の主な先行業績としては、山形寛の『日本美術教育史』(昭和42年)と林曼麗『近

代日本図画教育方法史研究』(平成元年)とがある。山形の研究は、美術教育史としての統一的な視点と方法論がなく、資料批判や資料解釈にも多くの問題を含んでいた。林の研究は自己表現的価値尊重の立場から大正期の自由画運動とその余波に重点を置き、明治期美術教育には、その対立項的役割を主に与えているように思われる。それゆえ明治期美術教育を中心的対象とした本格的な研究は、まだ無いと言ってよい。

本研究はこの期間の美術教育を次のような三つの視点から行おうとした。

1. 近代化・西洋化と非近代・非西洋的なものとの

葛藤が、どのように整理統合されていったかという視点。

2. 教育内容、正確に言えば被教育者に教育されようとした内容と、その設定主体が、どのように展開推移していくかという視点。
3. 教育内容に関して専門教育と普通教育とが未分化であった美術教育が、どのように分化していくかという視点。

また多様な、かつ分散して存在する美術教育史的对象、すなわち図画教科書の引用関係及び図画教員の勤務の総体がそれに該当するが、それらを可能な限り網羅し、それらの全体像を検討した。これは偶然出会った対象を単純に典型・代表事例と想定する危険を避け、等価な該当対象全てが形づくる一覧表あるいは像による把握を試みるためである。

序論では、前述の本研究における研究目的、方法などについて述べた。

第一章では近代美術教育の出発が単に無概念的な美術教育の実践にあるのではなく、むしろその前提となるべき近代的思考体系とそれによる諸制度、すなわち教育や美術に関する明示的・体系的思考、ならびに学校や学校教員という観念・諸制度等がその出発点であったことを論証した。

第二章では、明治期図画教育全体を近代化・西洋化と非近代・非西洋との葛藤が整理統合される過程という視点から概観し、従来の鉛筆画期、毛筆画期、教育的図画期という三区分を前提に論じるべきことが適当であるという見通しを述べた。前述の三視点から検討した各時期の詳細は、本研究の全体を通じて明らかにされるが、本章では従来統一的視点からは記述されなかった明治期図画教育展開の全体像を示した。また児童出版美術等の非制度的な美術教育の周辺についても触れ、それが学校美術教育と違って人々のイメージ欲求に素直に応じているものであることを示した。

第三章では幕末の開成所、そして従来研究されたことがなかった明治初期の画塾、すなわち彰技堂、十一会・不同舎、中丸精十郎画塾での教育の内容・方法を新資料を用いて明らかにした。開成所の画学教育については、旧幕府文書等の調査から、同所の画学教育が西洋の実学的意識から教育されていながら、図学と画学に教育体制が分化していったことを指摘し、また画学局関係者バリ万国博出品作に関連する資料についても検討を加えた。彰技堂での教育については、秋田県立秋田図書館蔵の岡忠精資料中に彰技堂での習画綴りや画論講義筆記録を発見し、その検討によって彰技堂の学習順序や講義用の西洋画学書等を多数特定できた。小山正太郎の十一会・不同舎の教育については遺族所蔵資料を使い十一会の校則等や不同舎での習画の実態を明らかにした。中丸精十郎画塾の教育については門人履歴から、それがオーソドックスな西洋画の教育内容・方法であったことを確認した。

第四章では主に鉛筆画教科書と西洋図画書との関係を実証的に明らかにした。従来鉛筆画教科書が西洋の図画書を模倣したことは漠然と想像されてきた。しかしどのような原本をどのように利用したのかは全く不明であった。筆者は二十三種の西洋の原本を発見し、それらを利用したと思われる、のべ百種の日本の図画教科書とそれらの関係を調査検討した。その結果、多くが原本全体の模倣ではなく、複数原本から図を寄せ集めて編集する「引用」と呼ぶべき利用形態であったことを証明した。中でもフランスのカッサーニュとイギリスのヴィア・フォスターの画手本が、日本図画教科書の二大引用源であったことも判明した。これらが多くの画塾で手本として使われたことも、画塾での習画や文献から確認した。

第五章では毛筆画教育資料を検討した。岡倉天心・フェノロサらの図画調査会報告の原文書は発見されていないが、それを収録した文献資料を発見して検討し、従来の研究で報告書内容とされてきたものが、原文書に重大な変更を加えたものであることを検証した。そして原文書中の美術画法教授順序表がフェノロサの形式主義的美術教育方法を端的に表していることを確認した。次に当時の教育雑誌等所載の毛筆画教育論を検討し、京都府や石川県での毛筆画教育の発生が必ずしも岡倉・フェノロサとは直接関係しないことも明らかにした。また従来岡倉らが構成する委員会が作成したこと以外全く不明であった褒賞画の実物を発見し、それが結城正明筆の歴史画を中心とする絵画群であったことを実証した。

第六章では明治後期の教育的図画の発生過程を詳細に検討した。教育的図画は鉛筆画・毛筆画ばかりでなく図案、色彩、透視図、投影図など多種の教材を統合した。教育的図画はその内容の曖昧さから、従来の研究ではその本質を明確に捉えることができなかった。本研究ではそれを、毛筆画教育がそれ自体を目的とする専門美術的になったことの弊害に対する反省から普通教育用の非専門的図画、すなわちそれ自体を目的としない、何かに役立つ曖昧な手段的図画として構想された図画と把握した。それ自体を目的としないため、すべての題材は手段の「練習」として統合された。その結果鉛筆画・毛筆画の本質的対立は単なる用具の問題に矮小化されることになったのである。教育的図画の構想は、明治後期の学校教育再編成の一環でもあり、それまで多様な個人や組織が多様に提案していた具体的な美術教育内容を、何でも統合する国家意志が統合し国定教科書として具体化したものと言える。また教育的図画の構想は、それまで未分化であった普通教育と専門教育の美術教育内容を明確に分化させることでもあった。

明治三十五年から文部省、正確には正木直彦主導の下に教育的図画運動とでも言うべきものが展開され、文部省図画教授法講習会の開催、図画教育会の結成、

同会編纂の図画教科書の発行、白浜徹の欧米留学等を経て、明治四十三年の国定教科書『新定画帖』に教育的図画が具体化される過程を実証した。教育的図画の理論と具体化を担当し白浜徹には、次のような相矛盾する改革方向の調停が課題となった。すなわち留学前の白浜が毛筆画の反省から抱いた理論的・幾何画的教育重視の意向、留学中に見聞した米国での日本画を参考にした美術教育の流行、そして児童心理尊重美術教育の世界的な傾向、帰国後に上から示されたと思われる実業教育振興の方針である。結局、多種の教材導入と相俟って、これらの相矛盾する改革方向が教育的図画の目的や内容の曖昧さをもたらしたと判断した。また教育的図画がこのように美術の本質から離れた、目的の曖昧な図画であったため、美術教育を標榜する自由画運動により批判される本質を最初からもっていたことも指摘した。

付録篇では明治期図画教員の勤務の実態を全国網羅的な勤務表として明らかにした。また各県別の中等学校及び高等諸学校の図画教員の勤務の推移を調査し一覧表にした。学校増設にともなう図画教員の明治中期からの量的拡大、同時期における図画教員の出自が初期の工部美術学校や画塾出身者から東京美術学校の卒業生に転換して行ったことをこれらの作業を通じて実証的に示した。また各地域毎にみれば多様な図画教員が時間的・空間的にどのような分布で勤務しているかの実態をも示した。またこの調査過程の中で、従来名前しか知られていなかった多くの初期洋画家の経歴を明らかにした。